

第二章 詞の種類

第一節 品詞別

従來の品詞別

從來世に行はれてゐる文法書は故大槻博士の廣日本文典を基礎とするものであつて、大體に於て西洋文典の模倣である。その品詞は大抵名詞、代名詞、動詞、形容詞、副詞、接續詞、感動詞、助詞、助動詞の九種であり、別に品詞外に接頭語、接尾語の二目が有る。所謂九品詞の説明は次の通りである。

名詞 名詞は事物を名づける詞である。

山川 人 鳥 政治 戦争 日本 東京

代名詞 代名詞は名の代りを爲す詞である。

私 あなた 此れ 其れ あれ 誰 どれ 何 幾つ 幾ら

動詞 動詞は動作を表す詞である。

行く 歸る 言ふ 思ふ 打つ 斬る 居る 有る

形容詞 形容詞は形容を表す詞である。

早い 晚い 白い 黒い 苦しい 楽しい

副詞 副詞は動詞、形容詞又は他の副詞を修飾する詞である。次の「」の様に

まだ(来ない) まう(来た) 大變(善い) まう(少し)

接續詞 接續詞は語と語とを接續する詞である。次の「」の様に

(帽子と)それから(靴) (品は善い)しかし(値が高い)

感動詞 感動詞は感動を表す詞である。

おや あら やあ おい はい

助動詞 助動詞は動詞形容詞の如く活用の有る詞で主として動詞や他の助動詞の下へ附けるものである。次の「」の様に

(行き)ます (云は)れる (知ら)ない (書き)まし

助詞 活用のない詞で他詞の下に用ゐるものである。次の「」の様に

(花)を (月)に (驚い)て (行け)ば (人)は (見て)こそ

なほ書に因つては名詞から數詞を獨立せしめて一品詞としたものもある。

詞と原辭との混同

第一期の品詞別は原辭の分類

西洋の品詞別は詞の分類

第二期の品詞別は詞と原辭の混合分類

文の成分は即ち詞でなければならぬ

この九品詞説は極めて粗朴な説であつてこの説では説けない問題が非常に澤山有る。この九品詞説は詞の概念が了解されずに詞と原辭とを混同して詞と名づけそれを九つに分けたものである。この九品詞の由來は下の如くである。

日本文典には舊來原辭の概念が有つて詞の概念が無かつた。古く語を分けて言(完辭)と助辭(不完辭)との二つに分けて考へ、活用の有無に由つて言を體言、用言の二つに分け、助辭を動助辭、靜助辭に分けた。これ皆原辭の分類である。之を第一期の品詞別とする。西洋文典が傳へられると共にその品詞説が紹介された。

西洋文典の品詞別は詞の分類であつて原辭の分類ではない。日本の文法家には西洋文典の所謂詞の眞義が分らなかつたから、西洋の品詞別を舊來の體用動靜の別に利用し、體言を細別して名詞代名詞副詞接續詞感動詞とし、用言を動詞(作用言)、形容詞(形狀言)の二つに分けた。動助辭は助動詞とされ、靜助辭は助詞とされた。然るに西洋の品詞別は詞の分類である。詞の分類を原辭の分類に取入れたから一方では原辭の分類としては不必要な分類が行はれ、詞の分類としては不合理な分類が出来上つたのである。之を第二期の品詞別とする。文章論では説話の成分へ成分と成分との關係上から主語、述語、客語、修飾語

等の名稱を附して居る。詞は斷句の成分である。然らば文章論に於ける成分はそのまゝ詞性論に於ける品詞でなければならない。例へば「花が咲きました」の「花が」は文章論的には主語であり、詞性論的には名詞であり、「咲きました」は文章論的には述語、詞性論的には動詞でなければならない。西洋文典の品詞別はそうなつてゐる。然るに日本文典では詞の概念が了解されなかつた爲に「花が」は何詞、「咲きました」は何詞かと考へずに「花」名詞、「が」助詞、「咲き」動詞、「まし」助動詞、「た」助動詞と考へた。それは原辭としてのみ考へたからである。

そんな考へ方はいけない。何處までも文章の成分としての詞の概念を明確にして「花が」は名詞、「咲きました」は動詞と考へなければいけない。「花が」を「花」と「が」とに分けて考へるのは其の後のことでなければならない。

それ故九品詞の中から詞でない助詞、助動詞を除き、詞として取扱ひ得べき残りの七品詞を批判して品詞別を立て直さなければならない。助詞、助動詞も除き、放しではいけない。他語へ助詞助動詞が附いて出来たそれ／＼の詞、例へば「花が」とか「咲きました」とかいふ様な類を含んだ凡ゆる詞の品詞別でなければならない。且つ單詞ばかりが詞ではない。連

品詞別の立て直し(第三期)
連詞をも含む品詞別

詞も亦一つの詞である。連詞をも含む品詞別でなければならない。

名詞と代名詞とは何れも事物を表す語であつて、その文章中に於て主語たり客語たる點に於て何等の變りはない。苟くも斷句の材料を詞と名ける以上、名詞、代名詞は一括して一つの品詞とすべきである。私は之を名詞と名ける。そうした上でその細分としての名詞代名詞の區別も出来る。

動詞と形容詞とは何れも作用を敘述する語である。その述語となり修飾語となり、歸著語（客語を取る語）となる點に於て變りはない。これも一括して一つの品詞とすべきである。私は之を動詞と名づける。

接續詞は副詞の一種である。

七品詞外に「或る人」の「或る」や「その人」の「その」の様なものが有る。之を形容詞と稱しても「遠し」「長し」などの形容詞とは別物である。別に一品詞を立てる必要が有る。私は之を副體詞といふ。

感動詞はそのまゝで善い。

そうすると詞としての品詞別は名詞、動詞、副詞、副體詞、感動詞の五つとなる。

五品詞

名詞

代名詞も名詞である。

第二節 名詞

（代名詞を含む）

こゝに名詞といふのは代名詞を含めていふのである。

名詞は事物の概念を表す詞である。

花

月

人

犬

夢

病氣

富士山

京都

論語

昭和

普佛戦争

日本民法

などは單詞の名詞で

「春の花」

「秋の月」

「子を思ふ親心」

「自分の利益ばかり考へる男」

などは連詞の名詞である。

從來名詞と云へば單詞の名詞ばかりを考へたのであるが、それは善くない。單詞であつても連詞であつても事物を表すものは皆名詞である。「子を思ふ親心」も一つの事物である。右に挙げた様な名詞は之を無格の名詞といふ。説話中に用ゐられて主語になるとか客語になるとかいかい様な資格がまだ定まつて居ない。こゝに無格の名詞は抽象的に考へられる

無格の名詞

だけで實用にはならない。實用される場合は必ずその資格が定まる。例へば

有格の名詞

花が咲いた

花を見た

の「花が」は主語となる資格が有り、「花を」は客語となる資格が有る。その資格は多く助辭「が」を「に」に依つて定められるが、又助辭なしに

お庭の花まだ咲かない？

その花一枝頂戴。

の「——」の様に不明確に定められる場合が有る。資格を定める助辭が附いて居れば助辭で籠めて一つの名詞である。助辭の有る無いに拘らずその資格の定められた名詞は之を有格の名詞といふ。實用された場合の名詞——斷句中の名詞——はみな有格である。

名詞の分類

名詞に種々有る。その分類は單詞の名詞に就いて行はるべきである。單詞の名詞を分けて本名詞、代名詞、未定名詞、形式名詞の四種とする。連詞の名詞には此の四種は勿論有るが又此の四種の混つたものも有る。

本名詞

本名詞 本名詞は實質的意義の常に定つて居る名詞である。大體に於て從來單に名詞と稱したものがそれに當る。例へば「山」は本名詞である。「山」には土地の高く隆起した處といふ實質的意義が有る。そうして常に一定して居る。本名詞の中には有形名詞(例、山、富

代名詞

士山)、無形名詞(例、時代、昭和)の別があり普通名詞(例、山、時代)、固有名詞(例、富士、昭和)の別が有るが實質的意義の一定に於ては一貫してゐる。

代名詞 代名詞は事物を指示することに由つて實質的意義が臨時に定まる名詞である。常に一定してゐるのではない。例へば「私」「貴方」「此れ」「其れ」「あれ」の類である。「私」は語る人が自らを指すのであつて太郎が言へば太郎を指し、次郎が言へば次郎を指すといふ様にその實質的意義は臨時に定まる。

未定名詞

未定名詞 未定名詞は實質的意義の存在を認めるだけでまだ之を定めて居ない名詞である。「だれ」「どれ」「どこ」「何」「幾つ」の類や、「なにがじ」「だれそれ」「何々」の類がそうだ。前者は未定な實質的意義のこれから定るべきを豫想し又は要求する。之を疑問といふ。後者は、未定な實質的意義の存在を認めながら未定を未定のまゝにしてその此れから定まるべきを豫想も要求もしないもので、之を不定といふ。

疑問と不定

未定名詞は從來代名詞の中に算へられてゐる。しかし其れは不合理である。若し本名詞、代名詞の解釋を改めて未定名詞の目を立てまいとするならば、「だれ」「どれ」「どこ」は代名詞へ加へ、「何」「幾つ」「いつ」は本名詞へ加へるべきである。何となれば「だれ」「我」「汝」

實質名詞

「彼」に對し、「これ」は「此れ」「其れ」「あれ」に對するが、「何」「幾つ」「何時」は直接に事物に對するものである。之を全部代名詞へ入れるの不合理である。

本名詞、代名詞、未定名詞の三種は皆實質的意義が有る。未定名詞でも未定な實質的意義が有る。それ故この三者は皆實質名詞と云へる。實質名詞は勿論形式的意義も有る。形式的意義の無い詞は無い。問題は實質的意義を缺くか缺かないかである。

形式名詞 形式名詞は形式的意義ばかりで實質的意義を缺く名詞である。

形式名詞
從來の九品
詞では説明
ない。

豆腐のことを鼈甲といふ處が有る。一人位は賛成する者も有らう。

そんなことを言ふ筈が無い。少しは子供の爲を考へるが善い。

思つた儘を書く。善いのが有る。

の「」の類がそうだ。右の例の「こと」は本名詞の「事」とは違ひ、事件、事柄の意ではなくその名の對象を指すのである。「者」は本名詞の「物」と違ひその動作者を指す。「筈」はその然るべき歸結を指す。「爲」は功利を指す。「儘」は變改を加へない狀態を指す。「の」は多數中の一物を指す。

形式名詞には實質的意義が缺けてゐるから右の例ではその上の「」の詞に由つてその缺

陥が補給される。「私の」は「こと」に實質的意義を補給し、「賛成する」は「者」に實質的意義を補給する。

西洋では私のいふ形式名詞例へば either, both, etcetera の類を代名詞へ加へてゐるが日本では代名詞へは加へて居ない。問題は形式名詞を從來の所謂名詞の中に入れるかどうかにある。その點に關して世の文法家の答は區々であらう。それは從來右の例の「こと」「もの」「筈」「爲」等の何詞であるかを考へなかつたからである。これらを所謂名詞の中へ加へるとすれば「名詞は事物を名づける詞である。」といふ定義は立たなくなる。「筈」「爲」などが名であつて「此れ」「其れ」などが名でないとは云へない。全部名詞になつて名といふ意味が廣くなる。又「こと」「筈」の類を所謂名詞でも代名詞でもないとするれば、名詞、代名詞以外に形式名詞といふ品詞が必要になる。この理論から從來の品詞別、名詞、代名詞……は不合理である。

動詞

第三節 動詞 (形容詞を含む)

「こと」に動詞といふのは形容詞をも含めていふのである。

動詞形容詞
は皆動詞。

動詞はものゝ作用を述べる詞である。

- 1 花が咲く 風が吹く 猫が鼠を捕る 人が椅子に凭れる
2 土地が高い 庭が広い 風が強い 流が速い

の「」は動詞である。(1)の「」は動作を述べ、(2)の「」は形容(状態)を述べてゐる。

動作と形容とは何れも作用である。

右の例に就いて「」だけを一動詞と見る時は「」は單詞の動詞であるが、次の様に「」

「」を一つの動詞と見ることも出来る。

花が咲く 風が吹く

土地が高い 流が速い

右の「」は連詞の動詞である。

今私は海岸をぶら／＼歩いて來ました。

今私は海岸をぶら／＼歩いて來ました。

今私は海岸をぶら／＼歩いて來ました。

今私は海岸をぶら／＼歩いて來ました。

今私は海岸をぶら／＼歩いて來ました。

の「」は何れも連詞の動詞である。何となれば何れも一つの作用一つの事件と見られる。最後の例の「」は斷句の全體が一つの連詞的動詞から成ることを示してゐる。

動詞とはものゝ作用を述べる詞である。苟くも作用を述べるものは、單詞たる連詞たるを問はず皆動詞である。又主語の有る無いを問はない。主語を除いた残りの動詞でも主語まで籠めたものでも、作用を述べるものは皆動詞である。

又「行く」「歸る」「遠い」「近い」の様に單辭から成るものも一つの動詞であるが、「行きます」「行つた」「行きました」「行きませう」の如く連辭から成るものも一つの動詞である。前者を單辭の動詞と云ひ後者を連辭の動詞といふ。

右に擧げた諸例の動詞は皆意味が終結して他へ從屬しない。之を獨立態の動詞といふ。然るに

咲く花 咲いて散る 咲けば散る 咲いたら見よう

の「」は意味が終結せず下への「」へ從屬してゐる。之を從屬態の動詞といふ。

動詞たるには二つの條件が要る。第一の條件は敘述の力が有ることである。これがこ

件 動詞の二條

從屬態の動詞

獨立態の動詞

單辭の動詞
と連辭の動詞

うである。こうでないとは判断を下す力が必要である。判断とは概念の運用からいふので詞の運用からは之を敘述といふ。第二の條件は作用を表すことに在る。敘述の力が有つても若し事物を表すならばそれは名詞である。

有活用動詞

動詞は活用の有るのが本體である。例へば「行く」は「行か、行き、行け」と活用し「遠い」は「遠く」「遠けれ」と活用する。之を有活用動詞といふ。然るに次の例の様に活用の無い動詞が有る。

無活用動詞

東京を出發する

東京を出發遊ばす

東京を出發まだ爲ない

東京を出發いつ爲ます

の「出發」は名詞ではなくて動詞である。しかし活用は無い。之を無活用動詞といふ。無活用の動詞にも色々有るが、此等は下へ「する」「遊ぶ」「致す」などの形式動詞を用ゐて、無活用動詞と形式動詞とが一つの連詞的動詞となる場合が多い。そうして形式動詞に活用が有ればその連詞的動詞は有活用である。例へば「出發何時する」の「出發」に活用はなくても形式動詞の「する」に活用が有つて其れが「出發何時する」全體の活用になる。

所謂動詞と形容詞

動作詞と形容詞 動詞を分けて動作詞、形容詞の二つとする。動作詞は動作を表し形容

分解されな
い直観
主體と作用
との分解

動作は時間
的。
形容は超時
間的。

運動は時間
に於ける變
化。
静止は時間
に於ける不
變化。
「有り」は靜
止的動作。

詞は形容を表す。この二つは動作動詞、形容動詞と云へば何れも動詞であることが明瞭になつて猶善い。從來の文法書は動作詞を單に動詞と云つて、形容詞と別々の二品詞としてゐる。

凡そ宇宙間の凡ゆる現象は、直観として現象そのまゝが分解されずに認識される場合もある。絶景を見て頭の中に映じた絶景の直観などはそうだ。しかしその認識が主體と作用との二つに分解されて再び統合される場合もある。「景色が佳い」と思つた場合、「鳥が鳴く」と思つた場合などはそうだ。「景色が」「鳥が」は主體の觀念で「佳い」「鳴く」は作用の觀念である。作用の觀念は其の認識され方が二つ有る。時間的と超時間的との二つである。「鳥が飛ぶ」の如く時間の経過の中に働く作用として認識された作用は之を動作といふ。「景色が佳い」の如く時間の経過に關係なしに認識された作用は之を形容(状態)といふ。

しかし動作の中には、「飛ぶ」「鳴く」「走る」の様な運動的の動作と、「居る」「有る」の様な靜止的の動作とある。前者は時間中に於ける變化で、後者は時間中に於ける不變化である。この靜止的動作と形容(状態)とは違ふ。靜止的動作は不變化でも時間の中に存するが、形容は時間を超越してゐる。此の道理が分らない爲に「有り」を形容詞だなどといふ人がある

「遠かり」
「近かり」は
形容詞では
ない。

芳賀博士の
形容動詞

のである。動作詞と形容詞との區別はその觀念の認識され方に在る。又活用に使いて言へは活用の仕方にある。活用の仕方が認識の仕方を規定するのである。二者の區別は決して意義の實質に在るのではない。單に認識の形式の上に在る。それ故「有り」と「無し」とは、意義の實質上からは一方が動作ならば一方も動作、一方が形容ならば一方も形容であるべき様に考へられても、その活用がその認識の仕方を指定するから、「有り」は靜止的動作として表され、「無し」は形容として表される。「無し」を靜止的動作として考へるには活用を動作的に改めて「無かり」とすれば善いのである。そこで「遠し」「近し」「善し」「惡し」は形容であるが「遠かり」「近かり」「善かり」「惡かり」は靜止的動作である。「遠し」が形容詞だからとて活用をも考へずに「遠かり」を形容詞へ入れるのは愚論である。

芳賀矢一博士の明治文典には、「遠し」は形容詞、「遠かり」は形容動詞といふ風に區別してあるが、私は「形容詞」「形容動詞」の二語を同義に用ゐる「遠かり」の様なのは之を形容性の動作詞といふ。

活用の無い動詞は他語との續き方で動作詞か形容詞かが分る。「出發」「勉強」などの類は「出發する」「勉強する」といふ様に動作詞の「する」へ續く。こゝにいふのは動作詞である。「綺麗」

「立派」などの類は「する」へ續かず、そうして「綺麗に」「立派に」の如く助辭の「に」へ續く。この「綺麗」「立派」は形容詞である。下へ助辭が附けばその助辭の性質に由つて動作詞にも形容詞にもなる

動詞	動作詞	運動的……………飛ぶ、散る、打つ、斬る、言ふ、死ぬ
	靜止的……………居る、在る、そなた、綺麗です、遠から(う)、長かつ(た)	
形容詞	……………遠い、近い、白い、黒い、綺麗、立派	

「綺麗」は「や綺麗」「どうだ綺麗か」などいふ様に使へば無活用の形容詞である。「です」が附けば「です」の活用が動作詞であるから「綺麗です」は靜止的動作を表す動作詞とある。(活用のごことは後章七頁に譲る。)

第四節 副詞 (接續詞を含む)

こゝに副詞といふのは接續詞をも含めていふのである。

副詞は敘述性の無い詞であつて、屬性の概念を表し他語の上へ從屬して其の意義の運用を調整するものである。

客はもう歸つた

客はまだ歸らない

明日は恐らく雨だらう

あの人も或は来るだらう

いつそ罷めよう

却つて悪い

大變塞い

中々難しい

の「」の類は副詞である。皆或る事柄の屬性を表してゐるが、之を敘述する力はない。そうして下の「」の語へ從屬して、「」の語の意義の運用を調整してゐる。初の例の「まう」は人が時間の上から事件を観る觀方の屬性を表し下の「歸つた」へ從屬して「歸つた」といふ考の考へ方を示す。「歸つた」といふ判斷は「まう」といふ形式の中に行はれるのである。「歸つた」といふ動詞の運用は「まう」に由つて定められてゐる。次々の例の「」も下の「」の語の意義の運用を定める。意義そのものへ從屬するのではない。意義の運用意義の取扱方へ從屬するのである。

凡そ詞が副詞たるには三つの條件が有る。

副詞は他語の意義の運用へ從屬する。

第一の條件として他語の意義の運用へ從屬するものでなければならぬ。他語の意義の實體（意義そのもの）へ從屬しては副詞ではない。意義の運用へ從屬することを運用といふ。連

運用

用とは他語の意義の用（運用）へ連るといふことである。副詞は必ず運用の語である。連體ならば副詞ではない。

副詞は屬性の概念を表す。

第二の條件は屬性の概念を表すことに在る。もし事物の概念を表すならば其れは名詞であつて副詞ではない。「花を観る」の「花を」も「観る」に對する運用ではあるが、「花を」は事物の概念を表すから名詞であつて副詞ではない。しかし此の問題は實際としては中々難かしい。例へば「今日出發する」「本を一冊讀む」の「今日」や「一冊」が名詞であるか副詞であるかは深く名詞の用法を研究した上でなければ多く誤解に陥る。

副詞には敘述の力が無い。

第三の條件は敘述の力の無いことである。「まう歸つた」に就いて言へば、「まう」には判斷を下す力即ち敘述の力は無い。若し敘述の力が有るならば其れは動詞（又は名詞）である。しかし此の問題も中々難かしい。「月明に星稀なり」「請ふ明に之を言へ」の「明に」が副詞であるか形容詞であるかといふ様な問題は形容詞の用法を深く研究した上で始めて決せられる。

副詞は何詞を修飾するか。

第一の條件の「他語の意義の運用へ從屬する」といふその他語とは如何なる語であるか。多くは動作詞、形容詞である。又稀には他の副詞たる場合もある。例へば

「暫く待つ」

直ぐ出掛ける

「少し遅い」

よほど善い

「いま暫く待て」

まう少し下さい

副詞の従来の定義

の「――」は皆副詞で下の「――」へ從屬するが、下の「――」はわでは動作詞、いでは形容詞、いでは副詞である。即ちいでは副詞が副詞の上へ從屬する。されば從來副詞を定義して副詞は動詞(動作詞)、形容詞又は他の副詞を修飾する語であると云つて來てゐる。

しかし副詞は名詞の上に用ゐられてその名詞の運用へ從屬する場合がある。

名詞を修飾する副詞

直ぐ隣が湯屋だから火事が心配だ。

先だつての三人組強盗は二人つかまつたが後のまう一人がまだつかまらない。

あの人はつひ近處に居ります。

たつた一年が待てないか。

皆さんは其れで善いでせうか、唯私だけが困ります。

貴方がたさへそう仰しやるのに、況や私どもが觀て居られるものですか。

の「――」は副詞であるがその從屬を承ける下の「――」は皆名詞である。然らば則ち從來の

副詞の定義が間違つて居ることは論を俟たない。

副詞の副詞たる所以はその從屬を承ける詞の種類に因るのではない。實にその從屬の仕方に在るのである。ごういふ仕方であるか。それは他語の意義の實體へ從屬せずに意義の運用へ從屬するのである。「直ぐ隣」の「直ぐ」は「隣」といふ意義そのものを修飾調整するのではなく「隣」といふ意義の取扱方を修飾調整するのである。若し「隣」そのものを修飾調整するならば「直ぐの隣」といふのである。この解釋は單に副詞に適用されるだけでなく、廣く連用の語全體に適用される。

副詞が名詞を修飾する場合の有ることは私が始めて考へ出したのである。國學院雜誌明治四十一年十一月號(二二頁)に發表してある。また漢譯日本口語文典の第六版以後にも記載して置いた。しかし私の發見とは云へない。何となれば英文典などに *Even God cannot give everything* などの *Even* を *God* といふ名詞を修飾する副詞だといふ風に論じて居るものが私より前から有ることを後から知つた。

副詞が名詞を修飾する場合の有ることをの發見は文法學上重大な問題である。何となればこれから一品詞としての接續詞が否定される。接續詞は副詞の一種に零落する。

名詞を修飾する副詞の發見は接續詞といふ品詞を否定する。

以上論じた所は凡て單詞の副詞である。しかし副詞は連詞たる場合もある。若し副詞の上に之に従屬する語があればその従屬する語と副詞とは兩方で連詞的副詞である。「もう少し下さい」「いま暫く待て」の「もう少し」「いま暫く」などがそうだ。

口語の副詞には實質副詞、接續詞、歸著副詞の三種がある。

實質副詞 實質副詞は實質的意義を有する副詞である。舊式文典に擧げてある副詞の諸例中眞に副詞なるものは皆實質副詞だと云つて善からう。

「まう」の假名遣は「もう」ではなく「まう」ではな

8112

1 大層 大變 大分 かなり 随分 よ程 中々 少し

まう まだ 段々 追々 愈 必ず きつと 一旦

決して 恐らく 大抵 大概 始終 時々 ざつと 先づ

一寸 暫く 長らく 久々 たとひ よもや まさか 若し

頓て 直き 直ぐ すつと うんと 略 粗まし 頓て

2 其れ故

3 なせ 何故 何と

の(1)の様なのは一定した實質的意義がある。之を本副詞といふ。(2)の様なのは實質的意義

が指示されて臨時に定まるもので之を代副詞といふ。(3)の様なのは實質的意義があるには有るが、まだ定つてゐない。之を未定副詞といふ。

歸著副詞 歸著副詞は西洋文典に所謂前置詞(Preposition)である。實質的意義がなく客語を取つて客語に由つて實質的意義を補はれる副詞である。

私の學校では來月あたり構内運動場に於て大運動會を開きます。

獨逸は一國の力を以て世界を相手にして戦つた。

僕をして言はしめれば彼等は取るに足らない人物だ。

の「於て」「以て」「して」などがそうだ。上の「——」を客語として之を統率し、客語を以て自己に缺けた實質的意義を補給せられ、客語と自己とで一體となつて一つの連詞的副詞となり、然る上で、下の「——」の動詞へ從屬する。

歸著副詞はもと口語には無かつたものであるが、嚴肅な説話では文語の歸著副詞を利用するのである。そうして「於て」「於て」は文語的口調を脱しないから之を十分口語的口調にする爲に次の様な云ひ方が出來た。

構内運動場に於きまして大運動會を開きます。

殿下に於かせられましたも御満足の體に見受けられました。

一國の力を以ちまして世界を相手に戦ひますことは容易なことではありません。

これは「於て」「以て」が動詞の「置いて」「持つて」から轉じたものであるから、其の動詞の尊稱態たる「置きまして」「置かせられました」「持ちまして」の形を借りるのである。動詞の形を借りただけで右の例はやはり歸著副詞である。

歸著副詞は英文典その他では之を前置詞 (Preposition) と稱して居る。前置詞とは客語の前へ置くからいふのである。獨逸語では客語の前へ置くのと後へ置くのとあるから關係詞とも云つてゐる。客語の前へ置くのは前置詞で後へ置くのは後置詞 (Postposition) である。

前置詞の性質は日本の文法家から誤解せられて居る。前置詞は客語たる名詞の前へ置かれてその客語を支配 (govern) するものである。單なる名詞——無格名詞——の前へ附ける頭助辭ではない。然るに故大槻博士などが之を頭助辭と思つた。『西洋の前置詞は名詞の前へ附くが日本の「を」「に」などは名詞の後へ附くからこれが日本の後置詞であらう。」「ば」「て」などの様に動詞の後へ附くのもあるから後置詞とは多少違ふが後置詞の類ひであらう。だから此等を一括して「てにをは」と云つて一品詞としよう。』と、こう考へた。「てにをは」は

前置詞後置詞關係詞

前置詞は客語を支配する。

前置詞の誤解

前置詞は頭助辭ではない。

後に他の人たちに由つて助詞と改名された。此の如きは皆前置詞の誤解であつて前置詞は決して助詞の類ではない。前置詞は意義が形式的ではあるが立派に一つの詞である。副詞の一種である。日本語で言へば「於て」「以て」などがこれに當るのである。唯客語の前へ置かずに次へ置くから「前置」と云へないだけである。

日本文典が進歩の順序として西洋文典を真似るならば其の品詞名は前置詞の代りに後置詞が置かれ、その語彙として「於て」「以て」等が收めらるべきであつた。私はこの順序を取つた。そうして然る後に後置詞が副詞の一種であることを知つた。

印歐語の前置詞は客語を取つた上で名詞を修飾する場合が澤山有る。名詞を修飾しても連體ではない。やはり連用であり副詞である。副詞が名詞を修飾することの發見はこゝにも重大な價值を持つ。

接續詞 接續詞は即ち接續副詞である。前語の意義を借りて自己の意義に利用し、然る上で後の語を修飾するものである。恰も前語と後語とを接續する様に見えるから接續詞と稱せられる。

接續詞は接續性の副詞である。

新年を祝し、並に貴下の萬福を祈ります。

の「並に」は接續詞である。常識的に言へば、前語の「新年を祝し」と後語の「貴下の萬福を祈ります」を接續してゐる。文法的に言へば、「並に」は後語「——」を修飾する副詞であるが意義が形式的であつて自己に實質的意義が無い。そこで前語「——」の意義を借りて自己の實質的意義の缺陷を填める。しかし前語の「新年を祝し」は決して「並に」の力に由つて後語「——」へ續くのではない、全く自己の力で「——」へ續くのである。故に「並に」が無くても新年を祝し、貴方の萬福を祈ります。

といふ様に立派に意義が通る。「並に」は「——」の既に表してゐることをまう一度再說するのである。即ち形式的意義に於ては

新年を祝し
並に 貴方の萬福を祈ります。

の如く「——」と「並に」とは並列的關係に立つ。「——」と「並に」との間には形式的意義に於ては從屬的關係はない。下の「——」を媒とする間接な關係である。譬へば父と母とは血族關係としては子を介して間接の關係が有るだけで直接の血族關係はない、夫婦としての關係は有るが血族としては何でもない。「新年を祝し」と「並に」とも形式的には何の關係も無

接續詞の四種

い。しかし「並に」は實質的意義を「新年を祝し」から借りる。借りると云つても「並に」の方が勝手に利用するので「新年を祝し」の方から云へば全然干知しないことである。こういう關係を寄生關係といふ。

接續詞はその用法に四種有る。

一、直接の統合關係を有する二語の中間に在つて、前語の意義を借りて後語の意義を修飾する。次の「——」はそうだ。

1. 新年を祝し 並に 貴下の萬福を祈ります。

そんなことは知りもしないし 又知る必要も無い。

轉地するか 其れども 入院するか爲さい。

2. 閣下 並に 諸君の健康を祝します。

臺灣 殊に 其の南部は非常に熱い。

善い洋琴は數千圓 乃至 數萬圓出さなければ買へない。

右の「——」は意義が直接に下の「——」に從屬する。二者の關係は統合關係である。

右の中(1)では接續詞「」が下の「」なる動詞を修飾するから之が副詞であることが了解され易いが(2)では下の「」なる名詞を修飾するから、人が一寸副詞でない様に思ふ。しかし副詞は名詞を修飾する場合が有ることを知つた以上は右の(2)の「」が名詞であることに何の不思議もない。

二、直接の統合關係の無い並列的二語の間に在つて、前語の意義を借りて後語を修飾する。次の「」はそうだ。

閣下の、並に諸君の、健康を祝ひます。

臺灣は、殊に其の南部は非常に熱い。

數千圓を乃至數萬圓を惜まずに出す積りでなければ善い洋琴は買へない。

病氣の爲に或は事故の爲に長年缺勤がちであつた。

朋友に對しても又社會に對しても全く面目が有りません。

右の「」は「」と對等ではあつても「」と何等の統合關係はない、各自別々に下の「」へ從屬する。

右の「」の用法では上の「」の意義が切れて居ない。即ち下へ從屬する。しかし次の「

は違ふ。

三、斷句の下へ置かれその斷句の意義を借りて下の語を修飾する。次の「」はそうだ。

樺太は大變寒い。しかし住んで住めないことは無い。

十一月頃の氣候は實に善い。がどうも何となく寂しい氣がする。

あの學校は近頃大分發展した。但し教育の點から言へば遺憾な點が有る。

此の用法では上の「」は皆斷句であつて一旦意義が終結してゐる。一度終止してゐる以上、「」が接續詞の「」と何等の統合關係のないことは明白である。接續詞「」は勝手に上の「」の意義を盗用するのである。

右の例に於ける「」は接續詞で即ち一種の副詞である。しかし之を改めて「だが」または「ですが」などといふと接續詞ではない。何となれば「だ」です」は敘述性が有るから動詞である。これは形式動詞の一種である。

副詞 實質副詞 形式副詞 歸著副詞(後置詞) 頓て 頗る 於て 以て 及び 並に

副體詞

九品詞説で
説けない品
詞

第五節 副體詞

副體詞といふ名目は從來の文法書に漏れてゐる、先づ例を挙げると

或る話好の恭の強い男

故伯爵の遺言である。

各關係團隊へ一々通知を出した。

本の御慰みに差上げたばかりで大したものでは御座いません。

の「」の様な類である。

「或る」は動
詞でもなく
形容詞でも
ない。

「或る」は辭典には接頭語としたのが有り、形容詞としたのが有る。接頭語は「小山」「真水」の「小」「真」などの様に下の語と共に熟語になるものであるから「或る」などを接頭語といふことは誤である。又「或る」は敘述の力が無いから形容詞ではない。「故」「各」なども「故人」「各處」などの様に用ゐられ、下の「人」「處」と共に熟語であるが、右の例などは「故、伯爵」「各、關係團隊」といふ様に「故」「各」の處で一す休み口調になるから接頭語ではない。つまり此等は從來の文法學では説明の附かないものである。私は此等を名づけて副體詞といふ。

副體詞の語
彙

副體詞は屬性を表す詞であつて他語（大抵は名詞）の上に從屬して其の意義の實體を修飾するものである。

右の例に就いて言へば、「或る」は屬性を表す詞である。「或る」は下の「」の語の上に置かれ、「」の語の意義の實體、意義其のものを修飾する。「故」以下も同様である。

今副體詞の語彙を挙げる

(一) 此の(人)	其の(大)	彼の(家)	孰の(山)
例の(話)	件の(人)	實の(母)	又の(御出)
抑もの(始)	本の(申譯)	まさかの(時)	若しもの(事)
(二) 或る(人)	さる(處)	明くる(日)	去る(十日)
(三) 故(父上)	各(高等學校)	本(病院)	當(銀行)
該(自動車)	明(廿五日)	昨(三日)	

などの類である。下の括弧内の語は修飾される語を例示したのである。

副體詞は太古には無かつた。後種々の語から轉成したのである。右の(一)は代名詞其の他の

名詞又は副詞たるべきものへ「の」が附いて出来たもの、(二)は動詞たるべき語から出来たもの、(三)は漢字音を其のまゝ副體詞に使つたものである。

動詞を修飾する副體詞

副體詞は大抵名詞を修飾する。初步の説明としては、先づ「副體詞は名詞の上に副ふ詞である。體とは名詞を指すのである。」と云つて置くも善い。しかし副體詞は動詞や副詞を修飾する場合がある。

例の又飲んで居る。

決して殿りはしません。本の障りました。

極軽く本の少し附けて下さい。

の「」は副體詞であるが、下の「」は動詞又は副詞である。其れだから副體詞は名詞を修飾する詞であると云ふことは俗解である。

副詞と副體詞との區別

副詞も名詞へ從屬する場合があり(第百頁)、副體詞も動詞や副詞へ從屬する場合がある以上、副詞と副體詞との區別は從屬される詞の相違に存しないことが明白である。全く從屬の仕方存するのである。名詞へ從屬しても動詞や副詞へ從屬しても、そんなことには關係なく、唯その意義の實體、意義其のものへ從屬するならば副體詞であり、意義其のものでなく

西洋人も形容詞を誤解した。

意義の運用、意義の取扱方へ從屬するならば副詞である。そこで副體詞の體は意義の實體をいふことで名詞といふことではない。又副詞は副用詞の意であるが用とは動詞の意ではなく運用の意である。西洋でも副詞は誤解されて居た。そこで Adverb と名づけられた。副動詞の意であるが日本では之を副詞と譯した。

西洋の形容詞 西洋の形容詞 (Adjective) といふ語は日本で誤解したばかりでなく西洋でも誤解されてゐる。西洋人の西洋文典の、形容詞に對する説明は

形容詞 (Adjective) とは名詞の意義を修飾する詞である。

とあつて、説明から云へば副體詞のことである。然るにその指す所の例から云ふと副體詞と冒稱副體詞との二種がある。彼等は副體詞の方を限定形容詞 (Limiting adjective) と稱し冒稱副體詞の方を性質形容詞 (Qualifying adjective) と稱して居る。限定形容詞は冠詞 (a, the)、數詞 (one, two の類)、指示形容詞 (this, that, some, same, all, の類) の三種で、此等は眞の副體詞である。性質形容詞は「白」「黒」「遠」「近」「暑」「寒」の類程度の意義の有るもので所謂比較法の有るものである。此の性質形容詞は敘述性があるから動詞の一種である。即ち形容動詞である。然るに不幸にして西洋の形容動詞は終止格が無く又主語を取ることが出来

ない。そこで彼等は動詞でない様に思つたのである。動詞は必ずしも終止格を要しない。日本語でも「奇麗な」「立派な」等凡そ「……な」となるものは終止格は無い。又「飛んだ災難」「大した人物」の「飛んだ大した」などは主語を取らない。それでも形容動詞である。

西洋人の所謂形容詞とは概念としては副體詞のことであつてその指す範圍は誤つて形容動詞にまで及んでゐる。故に西洋文典を訂正すれば形容詞中から冒稱副體詞たる性質形容詞を驅逐して之を動詞の中へ入れ、之を性質動詞(Qualifying verb)と云ふべきである。

日本では主たる限定形容詞の方を等閑に附し、却つて冒稱副體詞の方に眼を奪はれ、之を眞の副體詞と思つた。且つ Adjective の譯語なる形容詞といふ語の意義の誤解も有つた。所謂形容詞とは形容する詞の意で即ち修飾詞の意であつたのを形容を表す詞の意と思つたのである。從來「白い」「黒い」「長い」「短い」等の類を形狀言と云つて居たのを直に形容詞と改稱して之を西洋の形容詞(副體詞)と同じと考へた。誠にばか／＼しい間違である。

感動詞

第六節 感動詞

感動詞は「あ」「おや」「おこ」「はこ」の類で感動呼應の詞であると云へば判りが速い。しか

感動詞は主觀詞。

他は客觀詞である。概念詞。

しそいふ説明では明確でない。私は感動詞を解して次の如く言はうと思ふ。曰く、感動詞は說話者自己の心意の状態を主觀的に表示する詞である。感動詞以外の品詞は名詞、動詞、副詞、副體詞の四種みな概念を表示するものである。概念は人の心意に存する主觀的現象であると同時にこれに對する客觀的存在が豫想されてゐる。「花」といふ名詞は「花」の概念を表すが心中の概念の外に心外にその對象としての「花」の存在を豫想する。「妖怪」などいふ架空の概念でも假に客觀的存在として妖怪を豫想して考へる。虚構の事物、事件でも皆その存在を豫想する。然るに感動詞の表す所は全く說話者が自己の心意の作用そのものゝ表現である。驚いて「おや」と云へば「おや」は驚くといふ主觀的作用そのものゝ表現である。決して之を客觀的事件として認識したのではない。客觀的に表せば自己の驚きでも他人の驚きでも皆「驚き」といふ名詞「驚く」といふ動詞で其の概念が表示される。他人が驚いたのは自分の口から出る「おや」では表されない。自分の驚きは客觀的には「驚き」「驚く」で表され、主觀的には「おや」で表される。

感動詞も詞であるからやはり觀念を表示する、單に感動の聲だけなのではない。珍しい人の來訪を見て「おや」と叫んだとすれば「おや」には驚きはかりでなく驚かした刺激となつ

た觀念、例へば珍らしいとか何とかいふ様な觀念が含まれてゐる。然るに訁聲や噴嚏や笑聲の様なものは刺戟に因つて自然に出るので刺戟の表示ではない。可笑しくてハ、ハ、と笑つても可笑しいといふ觀念の表示ではない。單に可笑しいといふ觀念の刺戟の結果である。可笑しくなくて故意に笑聲を出しても其れは笑聲としての動作であつて語音の心象の發露ではない。但し嘲笑を象つた「へん馬鹿にして居らう」の「へん」や舌鼓を象つた「ちゅえ悔しい」の「ちゅえ」などは觀念を表すものであつて感動詞である。

感動詞の二種

感動詞に二種有る。一を實質感動詞とし一を形式感動詞とする。

實質感動詞

實質感動詞 右に舉げた「おや」だとか「はい」だとかいふ様に實質的意義の有るものを實質感動詞といふ。こゝにいふものは、自己だけで他詞の補助を受けなくても一つの斷句になり得る。唯「おや」と云つただけでも一つの斷句である。人の呼ぶのに答へて唯「はい」と云つただけでも一つの斷句である。しかし感動詞は觀念を表すものではないから、感動詞を用ゐた直ぐ後へ觀念を表す語から成る斷句を用ゐることが多い。例へば

おや、珍しいかたが入らした。

はい、さやうでございます。

clause
従句

の様にいふ。「——」は感動詞で一斷句、下の「——」は概念詞で一斷句である。「——」は主觀的に心意の働きそのものを表し、「——」は客觀的對象を持つ判斷を表す。「——」とは同じ意義を主觀的と客觀的との兩面から表すのである。故に二者共同で一つの意義を成すことになるので、全體として一斷句を表し、「——」は「——」の全體の中の主觀的方面のみを分擔する部分となり、客觀的なる「——」を主要部として之に従屬することになる。「——」は自己としては一斷句であるが、全體中の一部としては從屬部である。之を從句といふ。従句にも色々あるがこゝにいふのは主觀的從句である。一寸副詞に似てゐるけれども副詞ではない。斷句の成分としては修飾語には相違ないが品詞としては感動詞であつて副詞ではない。

實質感動詞の語彙の大概は次の如くである。

あ(そうか)	あゝ(困つた)	お(そうだ)	おゝ(寒い)
え(何です)	えゝ(面倒だ)	おや(變だ)	や(大變)
やあ(大變だ)	まあ(驚いた)	さあ(行かう)	はて(どうしよう)
さて(何としよう)	はゝあ(そうか)	へゝえ(さ様で)	ふゝん(笑はせらあ)

感動詞の豐富は世界無比。
民族性の發露

はあ(そうです)	はい(ご様です)	へえ(ご様です)	ええ(そうです)
おう(そうだ)	うん(そうだ)	いや(違ふ)	いえ(違ひます)
いゝえ(違ひます)	いゝや(違ふ)	なに(そうでない)	なあに(そうではない)
なあ(君)	ねえ(あなた)	よう(かあ様)	もし(あなた)
やい(小僧)	おい(新聞屋)	これ(何をする)	こら(何だ)
それ(見たか)	そら(違ふぞ)	あれ(御覽)	あら(大變)
ほら(立派だらう)	どれ(見せる)	ごら(出掛けよう)	どつこい(違ふ)
おつと(違ふ)	やれ(安心)	ほい(しまった)	へん(何の事だい)

下の括弧の中の字は續いて發せられる語の例示である。

感動詞の語彙の豊富なことは世界無比であらうと思ふ。これも日本の民族性の一端の發露である。日本人の一般的性格として對者の感情と共鳴しようとする心が強いことが感動詞を豊富ならしめたのである。感動詞が豊富でなければ種々の感情を表すことは出来ない。顔色や手足の動作の表情は西洋人の方が上手かも知れないが、其れは俳優や娼婦などのすること勿論程度の問題であるが士君子は喜怒哀色に表さないといふ嗜をも要するのであ

る。又音の高低強弱の烈しいことも表情にはなるが、其れも淑雅、謹慎を缺くものである。獨り感動詞の表情は意義的であつて淑雅を缺かず謹慎を傷けない。

感動詞のほとんどは人間固有の自然聲である。自然聲が意義を帯びれば感動詞になる。そういうものにはア行ヤ行ハ行等の音が多い。しかし我々が今日用ゐてゐる感動詞の中には代名詞その他の名詞から轉じたものもある。

〔代名詞、未定名詞〕

〔感動詞〕

これ……近稱……………これ、こら……………注意しろの意

それ……第二近稱……………それ、そら(ほら)……見ろの意

あれ……遠稱……………あれ、あら……………驚く聲

どれ……疑問……………どれ、ごら……………決心の聲、見せろの意

その他「どつこい」は「何處へ」から「どつこいしょ」は「何處へぞよ」から、「よいとこしょ」の「どいしょ」は「どつこいしょ」から來たのである。「さあ行かう」などの「さあ」は代名詞の「其」から轉じ、「さて」は代名詞の「其」から「然」が出來それへて「が附いたものである。まあどうしませう」などいふ「まあ」は「今は」の音便で、「正確には分らないまでも今は姑く何

形式感動詞

うしませう」の意から來たもの、「はて」は「將た」から來たものである。

形式感動詞 實質的意義をば概念詞(名詞、動詞、副詞、副體詞)に譲り自己は唯形式的意義だけを表す感動詞が有る。之を形式感動詞といふ。

善い時候になりましたなあ。

あの方の御名前は、何と仰しやいましたかねえ。

の「なあ」「ねえ」はそうだ。實質的意義は上の「――」が表し、下の「なあ」「ねえ」は唯「――」の觀念に伴ふ感情を形式的に表す。如何なる觀念に伴ふかをば「なあ」「ねえ」自身は表さない。全く内容が無い。内容は上の「――」が表すのである。

「なあ」「ねえ」は名詞、動詞、副詞、副體詞何れの下へも用ゐられる。又格の上から言へば主格、客格、修用格、連體格、終止格の下へも用ゐられる。

1 僕がねえ、大變な手柄をしたんだよ。

名詞主格の下

2 貴方の本當の考をねえ、言つておしまひなさいよ。

名詞客格の下

3. 貴方のねえ、本當の考をお言ひなさいよ。

名詞連體格の下

4. 明日ねえ、一寸お伺ひしたいと思ふんですが。

名詞修用的格の下

5 先づねえ、こういふことを考へて見たんです。

副詞(修用格)の下

6 昔或るねえ、強い武士が山路を通つたんださ。

副體詞(連體格)の下

7 雨に降られてねえ、困りましたよ。

動詞修用格の下

8月の善いねえ、風の涼しい晩でした。

動詞連體格の下

9 飛んでもないことになりましたねえ。

動詞終止格の下

意義は形式的であつても此の如く運用が自由であるから立派に單獨性が認められる。故に「なあ」「ねえ」は感動詞である。

實質感動詞にも「なあ」「ねえ」が有る。「なあそうだ」「ねえそうです」などの様にいふのは實

質感動詞である。

西洋の語には形式感動詞はない。唯實質感動詞が少しばかり有るだけで實に貧弱なものである。漢文には「嗚呼」「於戲」などの實質感動詞と「矣」「也」「哉」「乎」などの様な形式感動詞がある。

感動詞を西洋では間投詞 (Interjection) と云つてゐるが、字義から云へば實質感動詞は間投の詞ではない。形式感動詞の「なあ」「ねえ」は用法が自由に説話中の隨處に投入し得るもの

西洋には形式感動詞が無い。

であるから、これこそ眞の間投詞であるべきだ。西洋で實質感動詞を間投詞といふのは人を誤解せしめ易い用語である。

「なあ」「ねえ」の意義

「なあ」「ねえ」は自己と聴者との了解の共鳴又はその豫想を表す詞である。しかしその豫想が自然な場合と故意の場合とあつて、了解の誘導、賛成、主張、悟領などの意になる。

一、了解の豫想が自然な場合には人の感情を誘導する意になる。人に對つて「どうも悪い道だねえ」「どうも悪い道だねえ」と云ふのは、對者もそう思ふべきを豫想して對者の感情を誘ひ、自己も對者の感情に共鳴すると同時に、對者の自己に共鳴することを求めるのである。

二、對者の思はくが既に分つて居る場合には主として自己の對者に對する共鳴即ち賛成の意になる。右の「一」に答へて「全くだねえ」と言ふ様なのがそうだ。

三、了解の豫想が故意の場合には自己の考への主張になる。しかし主張だけではなく何處までも相手の自己に對する共鳴を豫想する。例へば「貴方の説はためですねえ」或は「貴方は知らないでせうが彼奴は悪い奴ですな」と云へば「君も之を知れ」といふ意が加はる。説話の中間に挿んで「あのねえ、昔々ねえ……」などいふのも相手の了解を豫想し、了解を待

つて其の上で次を言はうとするのである。

四、相手の了解を容易と見て簡単に豫想する場合は肯き悟る意になり、「ねえ」「なあ」が短く「ね」「な」となる。分つた、君は昨日怠けて復習しなかつたね」などいふ類である。これは相手の無い場合の獨言にも用ゐられる。「やあ雷が鳴り出した、これは晴れるな。」の類だ。自己が自己と對話する形式で自問自答である。自問自答的意識が鮮な場合には「晴れるね」と云ひ鮮でない場合には「晴れるな」といふ。

「ねえ」「なあ」の別

「ねえ」と「なあ」とは多少違ふ點が有る。「なあ」はア列の音で口を大きく開いて發し、「ねえ」はエ列の音で口を扁平にして發するから、發音の努力に對する自覺が違ふ。口を大きく開くことが無遠慮、快潤、男性的、嚴正の感を與へ、口を扁平にするがことが歪曲、遠慮、女性的、親愛の感を與へる。そこで「なあ」は「善うございますなあ」などの様に鄭重語（です、ます）の下へ使へば男子用の快潤性を帯びた最も叮嚀な語になる。女子には殆ど使へない。「善いなあ」の如く平常語（です、ます）の無い語の下へ使へば鄭重味の全然無い語になる。女子には獨言以外は殆ど使へない。「ねえ」の方は「善うございますねえ」の如く鄭重語の下に使へば女子の鄭重語になる。男子も使ふが「なあ」ほど鄭重に聞えない。對手を

親む心持が現れるからである。「善いねえ」の如く平常語の下に使へば鄭重ではないが親む意が現れるから「善いなあ」よりは幾分か穩に聞える。

「ねえ」の代りに「のう」といふ地方が有る。

感動の助辞

何の事だい

復降り出したぜ

あれにも困るて

困つてしまひますは

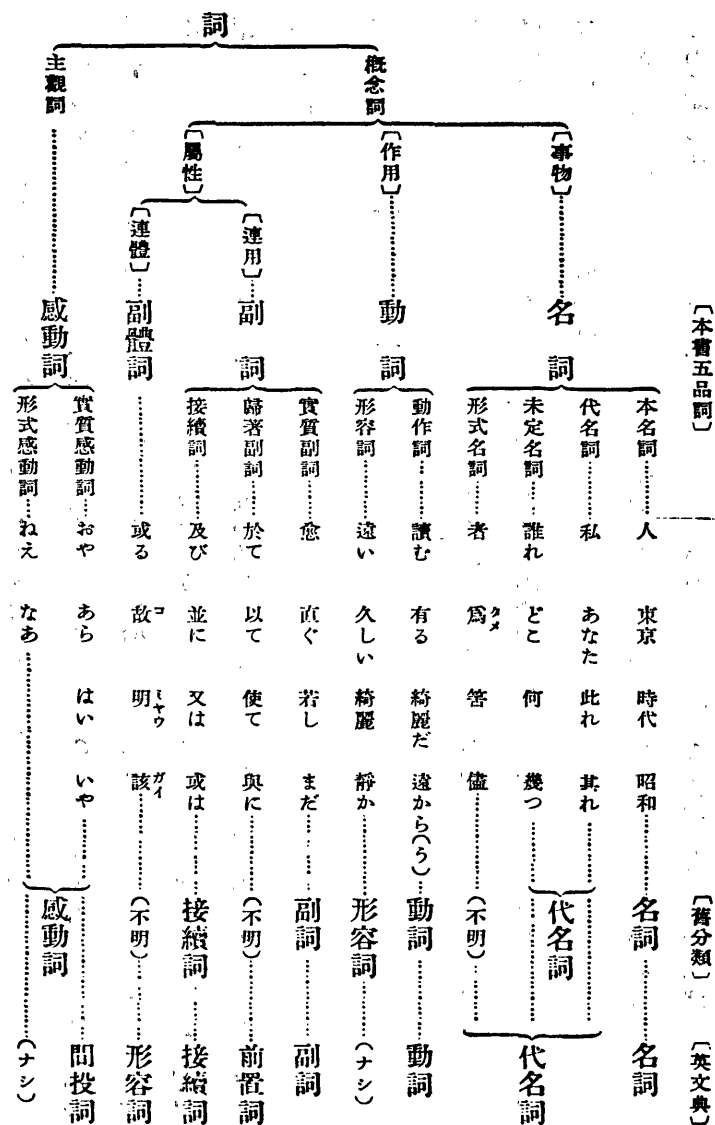
の「レ」の類である。前語に密著し且つその附く範圍が限定されてゐるから單獨性が無いだからこれらは助辭（原辭の一種）であつて感動詞ではない。但し
 そうですよ 其れも善いさ

其れも善いさ

の「よ」「さ」などはその附く範圍も頗る廣く、且つ前語に密著するといふ程でもないから見方に由つては形式感動詞とも云へるかも知れない。(拙著標準日本文典改撰版には「よ」「さ」などを形式感動詞へ入れてある。)

形式感動詞と感動の助辭とは日本語の生命であるとも云へる。日本人の思想は個人主義的でなく自他合一主義的である。形式感動詞及び感動の助辭はそれが言語に現れたものゝ重

第二章 詞の種類 第六節 感動詞



要なる一つである。試に形式感動詞「なあ」「ねえ」や感動の助辭を談話から封じられたらどうか。恐らく話は出來まい。外國人の日本語會話の様になるであらう。

西洋には形式感動詞もなく、感動の助辭もない。それはその民族性の然らしむる所であつて各人の思想が個人主義的であるからである。自他の感情の共鳴といふことが大して必要とされなかつたために發達しなかつたのである。支那語には形式感動詞があるが「矣」「也」「耳」「乎」「哉」などの様な知的又は單に感動的なものばかりで自他の共鳴に關するものはない。

變態の品詞

第七節 變態の品詞

詞が觀念を表すことは、詞の固有の性能である。そうしてその固有の性能には、如何なる觀念を如何なる狀態に表すかの別が有る。その性能の如何に由つて詞は、名詞、動詞、副詞、副體詞の五種に分たれる。

しかし一つの詞が必ず一つの性能を持つてゐるならば問題は簡單であるが、一つの詞が二つの性能を持つてゐる場合が有るから、この問題を解決する必要が有る。例へば

あの人は立派な紳士です。

京都を御立ちが夜の十二時だと聞きました。

の「紳士です」は上の「立派な」を受ける點から見て自己の内部に名詞的性能の有ることが明瞭であるが、用法が終止格になつてゐる點から見て動詞的性能の有ることも明瞭である。又「御立ち」は上の「京都を」を受ける點から云へば動詞的で、下に「が」が附いて主格になる點から云へば名詞的である。

然らば右の「紳士です」は名詞兼動詞で「御立ち」は動詞兼名詞か。そうも言へる。しかし此等は二性質を對等に兼ねてゐるのではない。一方の性能は輕くて、一方の性能に從屬して部分的性能となり、一方の性能は重くて、一方の性能を統率して全體の代表的性能を成してゐる。「紳士です」の上部には名詞的性能が含まれては居るけれども、全體を代表する性能としては動詞的である。だから「紳士です」は動詞である。動詞ではあるが名詞性動詞である。「御立ち」の内部には動詞的性能が含まれては居るけれども代表的性能としては名詞的である。だから「お立ち」は名詞である。名詞ではあるが動詞性名詞である。

此の如く一詞が二性能を有し一方の性能が代表的の性能になつてゐるものを變態品詞とい

ひ、一詞一性能の品詞を正態品詞といふ。變態品詞の品詞別はその代表的性能に因つて決せられるから五品詞中の何れかになる。

「紳士です」に名詞的性能が有つても之を名詞だと云ふことは出来ない。唯その名詞的性能を表す點を捉へて名詞部といふことが出来るだけである。「御立ち」もその動詞的性能を表す點を動詞部といふだけである。名詞部、動詞部等は之を品詞と云はずに品詞部といふ。品詞部は一詞の内部に於て代表的性能へ從屬するから下の他詞へは關係しない。しかし上の他詞へは關係することが出来る。右の「上手」が「立派な」を受け「御立ち」が「京都を」を受ける類で、品詞部が上の詞を受ける關係は凡べて品詞と同様である。故に前詞に對する關係だけは品詞に關する法則が凡べて品詞部へ適用される。

變態品詞の種々

變態品詞は次の様に種々ある。其の區別は甚だ煩鎖な様に見えるが、之を等閑に附しては語の品詞別さへ附かなくなる。面倒でも必要なものは考へなければならぬ。

名詞性動詞 名詞の積りで云ひ出し、未だその一詞を成し切らない中に態度を改め、動詞としてその一詞を終るものである、前例の「紳士です」の類である。

通人がる

田舎めく

紳士ぶる

百姓じみる

職工らしい

商人くさい

水つばい

議論がましい

など澤山有る。

名詞性副詞 名詞の積りで云ひ出し副詞として一詞を終るものである。

1 自分ながら可笑しい

散歩がてら人を訪ねる

兩方とも善い

鶯を籠ごと貰つた

2 出かけるたんび雨に遭ふ

の「」などがそうだ。その中(1)は接尾辭が附いた連辭である。(2)は本來の單辭から出來てゐるもので名詞部と代表部との區界が無い。

名詞性副體詞 名詞の積りで云ひ出し後から副體詞に變じたものである。これは口語には見當らない。文語には「山なす波」「鏡なす月」などいふ「何々なす」の類がある。

名詞性再名詞 名詞の内部にまう一つ名詞的性能が從屬してゐるものである。

此の帽子は君の。

人ばかりを責める。

此れだけが心がゝりだ。

他人までが氣の毒がる。

「君の」は「君の帽子」を指すのである。「人ばかり」は「人」といふ實質名詞的性能が、他を含

まないといふ意味の形式名詞的性能へ從屬してゐるものである。

動詞性名詞 動詞の筈で云ひ出し名詞に轉じてその一詞を終るものである。

あんな宗匠には弟子になり手が有るまい。

あんな兄弟の有る處へは嫁に來手が無からう。

此の學校へ這入りたてから秀才の名が有つた。

返事を爲様が遅いと云つて叱られた。

知らないことは聞くに限る。知つた風をしないが善い。

世の中は清むと濁ると大違ひ、刷毛に毛が有り禿頭に毛が無い。

無くてならない品だ、高いも安いも有るものか。

の「」の類がそうだ。「弟子になり手」などは見方に由つては「弟子になる」「へ」「手」が附いたとも見られるが、しかし「なり手」は一詞を成すから「なり手」を一つの動詞的性能名詞と見るべきである。

動詞性副詞 動詞の筈で云ひ出され途中から副詞になつたものである。

飯を食ひながら話をする。

人を尋ねがてら散歩する。

病氣が治り次第出勤する。

多ければ多いほど善い。

の「」の類である。

動詞性副體詞 例を見ない。

動詞性再動詞 動詞的性能が他の動詞的性能に從屬してゐる動詞である。

1 言ひたい 忘れっぽい 買ひ惜い 賣り易い

3 遠からう 近かつた 静だ 遙だ

の類である。詳しく言へば右の(1)の様なのは動作性の形容詞で、(2)の様なのは形容性の動作詞である。

副詞性名詞 副詞の筈で始まり名詞として終るものである。

躊躇することは無い。直ぐが善い。

そう一度には出来ない。それはまだが善からう。

の「」の類がそうだ。副詞の意義が實質化されて名詞となるのであるが、その云ひ出しは副詞的である。

副詞性動詞 副詞的に始まり動詞として終る。

「まう善いか。」「まだよ。」

今日はいけない、またね。

の」「の類である。副詞がその修飾すべき動詞の意義を吸収して自己が動詞的性能をも表すから、云ひ出しは副詞的でも終末に於ては動詞である。

副詞性副體詞 副詞的性能を材料にした副體詞である。次の「」はそうだ。

またの御出 先の學校 ちよつこのこと すんでの事

副詞性再副詞 副詞的性能が他の副詞的性能を從屬せしめて居るものである。連詞ならば「まう少し」「今暫く」の類が有る。方言では「まう少し」を「も少し」などいふ處もあるが、「も少し」は單詞なる副詞性再副詞である。

感動詞に關するもの 名詞性の、或は動詞性の、或は副體詞性の、或は副詞性の感動詞といふものも有る筈である。例へば花子といふ娘を呼ぶのに「花子」と云つて呼掛ければ「花子」は正體名詞で、名助を云はずに「ねえ」「こら」「おい」などと呼掛ければ正體感動詞であるが「花子や」と云へば名詞性感動詞である。呼掛の材料として名詞性が從屬部を成し呼掛そのものとしては感動の助辭が代表部を成す。こゝにいふものは理論上名詞ではなく名詞性感動詞でなければならぬ。しかし「花子」とのみ云つて呼べばこれは名詞であつてその名詞の運用として呼掛應になつてゐるだけであるから、下に「や」が附いた場合も「や」を無視して名詞の呼掛應の如くに取扱ふ方が一寸便利である。だから我々はそゝいふ取扱をすることが多い。

又感動詞性の名詞、感動詞性の動詞……などといふものも有る譯である。例へば「まあ綺麗」「やあ大變」は連詞であるが「ま綺麗」「や大變」といへば單詞なる感動詞性動詞である。又感動詞性再感動詞も有る。善い物上げるよ、そらね、自動車もあるよ、そらね、これは電車だよ」の「そらね」は感動詞へ感動の助辭のついた感動詞性再感動詞である。

複雑な變態品詞 變態品詞が更に別の性能に轉すれば複雑な變態詞になる。例へば

生みの母に逢ひたいばかりが彼の一生の願であつた。

何もそう兄貴ぶるにも當るまい。

の「逢ひたいばかり」は最初動作詞性(逢ひ)で、次に形容詞性(たい)となり、次に名詞性(ばかり)となりそこで一詞を完了するから、動詞性再動詞が名詞化したのである。動詞性再動詞は一種の動詞であるからその名詞化は動詞性名詞である。「兄貴ぶる」は最初名詞性(兄貴)で次に動詞性(ぶる)となり更にその活用の第四活段を以て名詞化したものである。名詞性動詞性の名詞であるが約り動詞性名詞の一種である。

如何に複雑な變態品詞でも其の種類は前に挙げた種類の何れかである。そうして結局その品詞別はその代表部の性質に由つて決定される。